

発達障害の子どもたちに、 市の教育委員会とKU-RENKAが連携し、 自然キャンプを実施する意味について¹

石田陽彦²

【要約】

この短い資料の中で、筆者は広汎性発達障害の子どもたちと自然の中で行うキャンプについて、行う意味とその方法を簡単に示した。また、この広汎性発達障害児との自然キャンプは葛城市教育委員会の協力でKU-RENKAが実施してきたものである。

キーワード：レジリエンス、沢登り、ライフ・サポート

1. 自然体験活動の効果

「軽度の発達障害のある子どもたちには自然体験活動を行うことが良い効果をもたらす」と聞かれた方も多と思う。その言葉の真意はどういうことなのだろうか？「自然」そのものの中に、彼らの心や魂の何か、を回復するのがあるのだろうか？それはものごとをぼんやり考えている時にはあながち否定できないにしても、ややオカルト的と言うか神秘的すぎて、わざわざ彼らに自然体験キャンプを積極的に奨励する根拠としてはほど遠い気がする。ならば自然体験活動にSSTや行動療法的手法を取り入れて、社会になじむための訓練的の場として「自然の場」を活用し社会適応的な訓練をするのだ、ということは単に訓練の場として自然の中で活動を行っただけであって、「自然体験活動が発達障害児に効果がある」ということを正当化することにもならないような気がする。その程度ならば、わざわざ遠くまで来て大自然の中でする必要もない、と言うことになる。

では、軽度発達障害の子ども達にはなぜ自然体験活動が良い効果をもたらすのか？

絶対正解などはあり得ないにしても、彼らが今後歩んでいく成長の未来的予測においてどのように育ててほしいかという希望と、訓練で身につける処世術ではなく、ここで彼らが「ある体験」をすることによって、これから先の自らの生き方にどのように希望を見出すか、を考えながら関わる深い思慮が必要なのである。パッケージングされたマニュアルの対応によって大人にとって都合のよいSST的な行動形成をするのではなく、ただ、そこでかかわるリーダー（大人）と子どもが他では体験できないような深い人間関係を体験できるようにするのだというゆるぎないエフォートが必要である。このようなかかわりを持つためには、自然の中でソーシャルスキルトレーニングを子どもに施すという安易な発想ではなく、関わるリーダー（大人）の方が子どもたちを成長させ

¹ KU-RENKAは、Kansai University, Resilience Network Center in Katsuragi Areaの略である。葛城市内にSTEPが設置している発達障害児の支援施設であり、石田を中心として運営されている。

² 関西大学社会的信頼システム創生センター、関西大学臨床心理専門職大学院

るためにどのような関係性を育てていくことが必要なのかということに関して、しっかりとした理解を持っておく必要がある。

ここは発達障害論を語る場ではないのでこまかな説明まではできないが、KURENK Aが葛城市教育員会と協力し、(独) 曾爾青少年自然の家で行ってきた発達障害児にかかわる自然体験活動キャンプは、大自然の中で「自然に」生まれる状況を利用して、他では体験できない非常に濃い人間関係を子どもたちにリーダー（大人）との間で体験してもらう場所なのであり、これが「ある体験」の内容であり、そのような関係体験が短期間に子ども達に驚くべき大きな変化、成長を促してきた所以である。

2. 体験の観点から見たアクティビティーの意味

2-1 エフォート

すべてのアクティビティーについて説明することは困難なので、一番重要視しているアクティビティーのもつ意味を「ある体験」の観点から説明しましょう。

その前にリーダーが子どもたちに実行する「子どもが他では体験できないような深い人間関係を体験できるようにするのだ、というゆるぎないエフォート」について簡単に箇条書きにて説明しよう。

- ① みんなとなかよく同じことをすることを強要しない。好き嫌いがあって当たり前。
- ② みんなと同じペースで活動することを強要しない。けれど、みんなができるまで待つ。

あくまでやろうと自らすすんでやる気になるまで待つ。全体のプログラム構成を柔軟に変えてでも、参加者全員が自ら活動し始めるまで待つ。

- ③ 困ったことをしても「ここは叱るところ」と教育的な解釈をして叱ることはしない。なぜなら、困ったこともそれをせずにはいられない＝したい、ことが問題行動の誘引だと解釈し、したい理由をゆっくり聞こうと努力する。
- ④ 丁寧な言葉の選択をする。

たとえば「友達のところに行って遊んでおいで」は子供にとって理解不能な言葉が2つもある。ここに集まっている子どもたちは彼にとって「友達」ではない集まりである。「遊んでおいで」と言われても遊び道具もないし、なにをどう遊ぶのかもわからない。この場合「遊んでおいで」ではなく単に「みんなのところに行っておいで」が適切な指示なのである。

- ⑤ 絶対に逃げない、はなさないで向き合う関わり。

困った事態が起きた場合、全体プログラムを遂行するためにその子への個人的かかわりをやめてプログラムの遂行に安易に向けてしまわない。何時間でもその子と1対1で向き合う。

つまり、その場において社会的に見て適応的な行動を子どもに臨むのではなく、レジリエンスを高めるようなかかわりを常に考えることである。

2-2 代表的な「沢登り」のアクティビティーについて

このようなエフォートを胸に子どもとの活動を行うと、自然の中で行う「沢登り」という課題が、彼らの苦手とするいくつもの問題を克服するために、自然（無意識に）に行われる人間関係を凝縮したものであることが理解されよう。

沢に足を踏み入れた瞬間、冷たい水が彼らの皮膚感覚を刺激する。履いた靴の中に砂が入ってこようなものなら、感覚過敏をもつ子なら、靴を脱ぎ砂を払うことに必死になり前には全く進めない。歩き始めても川底は石がごろごろしており、なかなかまっすぐは進めない。それどころかバランスを崩してこけそうになってばかりで、一人では一歩も前には進めない。隣にいるリーダーの手や腰を思わず必死につかむ。少しずつ慣れてはくるものの、だんだん歩くのも嫌になってくる。でも後ろをみると誰もいない。戻ることは許されない気持ちになる。リーダーや他の子に励まされ、また一歩ずつゆっくり歩み始める。途中で大小の滝がいくつかあり、それを見ただけで怖くて後ずさりする。しかし、最初はリーダーの手を借りてなんとか引き上げられていた子も、終盤の滝に来ると自ら登ろうとして足腰や手に思いきり力をいれてバランスを保って滝を登り切ろうとする。深い足のつかない水たまりに出くわすと、そこを何とか回避して進もうとする努力をする子もいれば、その中に恐る恐る入って渡り切ろうと努力する子も出てくる。

子どもたちがそれぞれの運動能力や感覚を研ぎ澄まして沢を歩ききる3時間は、リーダーを介して彼らが人間関係を強烈にかつ無意識に必要とする3時間である。この沢登りには軽度の発達障害の子供たちがもっとも苦手とされる課題が凝縮されているともいえる。それらはラーニングセットの学習、注意の方向の学習、感覚統合の学習であるといえるが、それ以上にこの学習効果を導くために必要なのが、濃厚な人間関係を基盤にしているということである。

そして、このような濃厚な人間関係の形成は一見日常でも行えそうであるが、実は日常には同時に人間関係の形成を逆に阻害してしまう否定的な問題も多く存在しているという事実がある。であるから、非日常的なキャンプという場面でこそ、彼らにとって好ましい濃厚な人間関係をもとに日常ではなしえない多くの経験と安心感が得られる。そのことによって自尊感情や自己効力感が生まれ、リーダーが子どもたちに望むレジリエンスの形成が短期間になされやすいのである。

2-3 非日常的なレジリエンス形成活動と学校教育

このような試みは、学校教育とは相まみえない一面を呈しているかも知れない。しかし、非日常的に子どもたちにレジリエンスを与えることは結果的に学校教育において最大の効果が出ていることもこれまでのキャンプに参加した子供たちの適応度において証明されてきた。軽度発達障害の子供たちの成長には、学校教育で学ぶべきことと、学校教育では学べないことを明確に区別し、成長・発達の車の両輪として非日常的にレジ

リエンスを高める方法として、学校外教育の一環として葛城市が実施してきた取り組みが今後も続けられるべきことは重要なのは間違いない。このことも学校教育と一線を画するKU－RENKAの支援活動の有益性を示すものである。

3. 脳の個性の理解へ

精神科における診断基準がアメリカのDSMを用い始めてから、すべての精神科疾患が「症」や「病」から「障害」という言葉に置き換えられている。このことが発達障害児の治療的？かかわりにも大きな影響を与えてしまっている。なぜなら「障害」という単語を用いた診断はその子の脳に生理学的な問題があり「治らないもの」として理解されがちだからである。発達障害は脳のどこかに傷があるものでもないなく、脳の機能が傷んでいるのでもない。単に生まれる前から持っている脳の個性の差でしかない。また、逆に言うなら、脳機能の問題として統合失調症が神経伝達物質の過剰な分泌によっておこるものであると断定されているが、その分泌を調節する薬物を投与されても完全に治った例を見たことがない。脳科学は進歩し理解が深まった一面もあるが、脳が起きていると思われる問題（障害）を治療できるほど進んではない、このことを認識して濃厚な人とかかわりによってこそ彼らの成長と発達を促すことが現状ではもっとも重要なのだと伝えたいと思う。

4. まとめにかえて

発達障害者への社会復帰への取り組みは急務に思われている。その理由は、成長した発達障害者の精神疾患の罹患率の多さと、NET・ひきこもりに至る若者の多さゆえである。幼い段階から診断されうるこの障害に対して、医療的視点からより、心理・療育的視点からの早期支援が有効なのは明白であるが、教育や指導があまりにも訓練的になりすぎ、障害児の心の成長を無視したかのような、健常者に合わせる社会適応訓練になりすぎてしまっていることに警鐘を鳴らす意味を込めて、我々はこのような取り組みを進めている。

成果は、単に形成された適応的行動の多さによって評価されるものではなく、その児の成長後の人生に対する満足度でしか図ることはできない、と言うトータル・ライフサポートという気の長い視点でのかかわりをKU－RENKAは葛城市で実践しようとしている。

Research Note of the “KU-RENKA” Program
- Practical Supports for Pervasive Development Disorder Children -

Haruhiko ISHIDA

【Abstract】

This short paper explained about the meaning and the simple method of outdoor experience classes with pervasive development disorder children, which are blessed with rich natural environment. The pervasive development disorder children’s outdoor experience classes are carried out by KU-RENKA (Kansai University, Resilience Network Center in Katsuragi Area) in cooperation with Katsuragi city board of education.

Keywords and Phrases: resilience, swamp climbing, life-support